



日本海政令市にいがた

水と土の芸術祭

Niigata Water and Land Art Festival
2009 2009年7月18日[土] 12月27日[日]

平成21年5月25日

各位

水と土の芸術祭・東京説明会のご案内

時下、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、新潟市には、信濃川と阿賀野川よりもたらされる日本一豊富な水と土から生まれた生活文化が存在します。私ども水と土の芸術祭実行委員会は、地域住民が自らの生活文化の価値や魅力を、アートを媒介として見直し、国内外にその魅力を発信することを目的に、「日本海政令市にいがた 水と土の芸術祭 2009」を7月18日から12月27日まで開催いたします。

当芸術祭では、国内外のアーティストにより、60余りのアートを市民や地域と協働で制作し展示します。また、新潟市美術館、新津美術館、みなとぴあ（新潟市歴史博物館）において、市民総参加で、水と土の生活文化を展示するかつてないスタイルの美術展を開催します。さらに、地域の伝統芸能、祭り、イベント、食などを紹介します。

開催に先立ち、東京で当芸術祭の趣旨、アート作品及び企画内容などを、実行委員長篠田昭（新潟市長）とディレクター北川フラム（新潟市美術企画監）からお話しさせていただき説明会を開きます。また、4名の参加アーティストが作品の構想を発表します。

ご多用の折とは存じますが、この機会にぜひご出席たまわりますようお願い申し上げます。

水と土の芸術祭実行委員会事務局

記

説明会

- ・日時 6月8日（月）11時30分～12時45分 開場11時
- ・会場 表参道・新潟館ネスパス（渋谷区神宮前4-11-7 表参道ヒルズ裏 地下鉄表参道駅A2出口）
- ・内容 趣旨説明 篠田昭（水と土の芸術祭実行委員長 新潟市長）
事業説明 北川フラム（水と土の芸術祭ディレクター 新潟市美術企画監）
作品構想発表 磯辺行久 河口龍夫 日比野克彦 土屋公雄

昼食

説明会終了後、食の王国・新潟のコシヒカリや郷土料理、日本海の幸など、食事を用意しています。

出欠

添付の申し込み用紙で6月3日までにFAXで事務局までお伝え下さい。（メール、電話でもかまいません）

ホームページ

URL <http://www.mizu-tsuchi.jp>

事務局連絡先

水と土の芸術祭実行委員会事務局（新潟市交流推進課）五十嵐政人 蝦名淳広 白井麻也
TEL025-226-2627、2629、2625/FAX025-228-6188 E-MAIL koryu@city.niigata.lg.jp
〒951-8550 新潟市中央区学校町1番町602 1

新潟市



信濃川の河口に開けた湊町で開港五港の一つ。市内は信濃川、阿賀野川の二つの大河が流れ、新潟平野が広がる。市域の4分の1は海拔0メートル地帯である。近隣15市町村が合併し、平成17年、本州日本海側で初めての政令指定都市になる。人口は81万人で新潟県の3分の1を占める。米、チューリップの出荷量は日本一、食糧自給率63% 東京から関越道で300キロ、上越新幹線で2時間、空港、港を持つ交通の要衝である。

篠田昭（水と土の芸術祭実行委員長）



信濃川と阿賀野川がもたらした日本一大量の水と土、この水と土から生まれたのが越後平野であり新潟湊であります。土は新潟弁で言うと「べと」、「べと」はかつて、へそまでつかる深田で、大変な農作業を農民に強いました。猛烈に水と土と闘った結果、深田は美田に変わり、日本一の米どころになりました。さらに日本一の大農業土木施設や治水・利水技術、水と土に関するノウハウが備わりました。日本一の水と土と闘った心と体を癒すため、祭り、神楽、歌、踊りといった地域芸能が生まれました。今こそ、先人に敬意を表し、ここから生まれた水と土の暮らし文化を発展させていきたいと思っています。

世界で元気になっている都市は、歴史・文化・芸術によるまちづくりを進めているところです。イタリアのポローニャ、スペインのバルセロナ、イギリスのグラスゴー、その中でも際立っているのがフランスのナント市です。新潟市は1月にナント市と姉妹都市になりました。文化創造都市へのキックオフとしてこの芸術祭を開催したいと考えています。

北川フラム（水と土の芸術祭ディレクター）



地球だけが水と土の惑星で、水とどう付き合うか、土とどう付き合うか、新潟の田んぼをみればわかるように、新潟の人たちの工夫、技術、試みというのは、本当にすごい。いろいろなものは、土を耕してるところから起きてくる。海拔0メートル地帯、泥沼のなかで生活してきたなかで、家や集落に残された水、土の記憶や記録を外に出して、外の人に見てもらいたい。アーティストだけでなく、市民全体がかかわる世界で初めての芸術祭をつくらうと動いている。彫刻とか絵画というのはアートの一部だとは思いますが、自然と付き合うための技術の方がはるかにアートだと思う。田んぼとか食べ物の方が、ずっとアートだから、アートという概念を水と土の芸術祭で変えさせたいと思っている。人類の来し方行く末を展望できる場所が新潟だ。

亀田郷（現在・新潟市江南区）



作家の司馬遼太郎氏は亀田郷を訪れ、「食を得るといっただ一つの目的のためにこれほどはげしく肉体をいじめる作業というのは、さらにはそれを生涯繰り返すという生産は、世界でも類がないのではないかと」、「街道を行く」の中で記述しています。

説明会参加作家



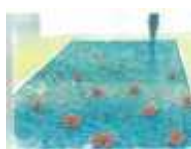
磯辺 行久（いそべ ゆきひさ）
近年、自然環境の変化と地域社会の関係を主題とする大規模な作品を発表し続けている。



作品イメージ



河口 龍夫（かわぐち たつお）
「関係」というテーマの下に、様々な現象を視覚化する作品を制作し発表している。



作品イメージ



日比野 克彦（ひびの かつひこ）
個展・グループ展を多数開催する他、舞台美術、パブリックアートなど、多岐にわたる分野で活躍。



作品イメージ



土屋 公雄（つちや きみお）
様々な記憶の品の収集・再構成による作品化や、土木・建築的な作品など。



作品イメージ